



那須塩原工場にて。甘露寺信房代表取締役(中)高橋光哉常務取締役(右)甘露寺忠房執行役員(左)

ウッドデザインの進化を訪ねて 自然へのホスピタリティと森の中の工場 2024年受賞 最優秀賞(経済産業大臣賞)



栃木県那須塩原市の里山の面影を残す森のなかに木造建築の工場がある。木製ブラインドの製造・販売を手掛けるナニツクジャパン株式会社の新たな拠点だ。「森林を生かしたモノづくり」を掲げる同社は、木製可動ルーバーの一貫生産、国産材を活用する工場を目指し、この地に工場を建設した。

国産材活用への取り組みを推進する拠点としての活動が高く評価され、ウッドデザイン賞2024の最優秀賞(経済産業大臣賞)を受賞した。同社を訪ね、開発の思いを聞いた。同社は、1995年に認知度の全く無かったウッドブラインドを米国から輸入し、国内販売することで創業しました。当時は、納期遅延で顧客の信頼を失いかけたこともあり、こうした出来事をきっかけに日本での生産を決意し、2003年に国産化を開始しました。当初は、埼玉県戸田市に工場を構えましたが、受注量増加に伴う増産の必要性などの理由により、手狭になっていた戸田工場から一貫生産のできる新工場施設への「移転プロジェクト」が2018年にスタートしました。全国各地で工場用地を探しましたが、候補地の多くが工業団地で、自然を残さずに森林伐採された造成地でした。自然を感じる事が難しく、長年かかって育つてい



周囲の森林を借景に木質感あふれる事務所棟の一室

た木々を全て伐採しているという残念さ、喪失感が残りました。そこで生まれたのが『森の中の工場』プロジェクトです。「移転は2022年5月。那須塩原市の土地は森林が約5.4ヘクタールあり工場用地としては十分、国道に面しているため交通の便が良く、東京からも比較的近い。これらの条件は全国から資材を調達し、製品を全国に発送する同社にとって理想的な立地条件だった。

木造建築と自然との調和

工場建設にあたり、こう考えたという。「木製の製品を作っているのだから、建物も木造であるべき、それも国産材を利用することが重要と考えました。原材料調達の面からも、地域の森林の保全や環境対応の面からも、その思いは揺るがなかった」。新たな工場は森林約5.4ヘクタールのうち、約1ヘクタールを開拓した土



木造の製造棟は温かみがあり、目にも優しい空間だ

建設も地元の建設会社に依頼した。従業員の採用も地元を中心に行なっており、地元雇用の促進に貢献している点は重要だ。「最初は素人ばかりで大変でした。でも、高校生の新卒採用を毎年続けようと思っていて、森林と同じで、ともに育つ、という考え方です」

今回の受賞の大きな理由のひとつが森林活用を通じた公益的な活動である。荒廃していた森林を森林組合の協力を得て、倒木の除去や枯木の伐採、間伐を実施し、森を散策できる小径も整備した。仕事の休息に使ったり、来訪客に森を感じていただくことで好評を博している。さらに来訪者や見学者とともに、敷地内に従来のもよりも花粉の少ない少花粉の杉の苗木を1000本植林する活動もスタートした。「千本杉の森」と名付けられたこの場所は、いつ

かこの森林で育った木から木製ブラインドの製品をつくりたい、という思いが込められている。「木の製品を扱う会社ですから、森を育てることから学ぶことが大事です。いまの若い社員がリーダーになる頃にはこの木を使って、我が社の製品をつくりたいですね。地域の方々にもこの工場が森林を生かしたモノづくりの拠点として誇りを持ってもらいたいと考えています。次世代を担う若者たちには、自然の中で働くことの素晴らしさを伝えていきたい」と甘露寺社長は語ってくれた。

木材利用へのこだわり

工場建設をきっかけに、木製ブラインドに使う木材に国産材を取り入れられるようになった。「日本の木材資源は豊富なのに、使われていない現状がある。こ

れはもったいない」と思い、国産材を積極的に使うように様々な試行も始めました。県内の杉材を使ったブラインド製造はその成果のひとつです。この工場ができたおかげで木材加工から最終製品化までの一貫生産が可能になりました。「木製ブラインドの羽根の加工には高い精度とノウハウが求められる。自然のものであるがために発生する反り、曲がりなどの課題などをクリアする必要があります。試行錯誤を兼ねながら、国産材を活用したスギシリーズのウッドブラインドが完成した。同社の工場で薄板に加工、塗装をして羽根に仕上げ、最終製品に組み立てる。すでに公共施設や宿泊施設等での採用もあり、確かな手ごたえがあるという。

現在扱っている国産材は栃木県産材が主だが、今後は地産地消のニーズへの対



地産地消の製品化に取り組んでいく

応も積極的に取り組み、各地域でつくられた木材を使って製品化し、地域の施設に活用していただくことを目指している。オールカستمメイドのメーカーならではの強みを活かしたサステナブルなモデルとなる。

木の良さに触れて、理解を深める

「木製ルーバーを採用していただくためには、やはり最終的に決定権のある施主やオーナーの方々にその良さを知っていただくことが必要です。『森の中の工場』を通じて、木の成り立ちから加工の技術、質感や機能などを理解していただき、国産材利用の広がりにつながればと思っています」。

取材を通して、同社の「森林と国産材を活かしたモノづくり」に対する強いこだわりと、地域貢献に対する熱い思いを強く感じた。甘露寺社長は今回の受賞についてもお聞きした。

「大企業ではない私どもの会社が地道に取り組んできたことを評価いただいたのは嬉しいです。何よりもこのような賞をいただけるような会社で働いていることを従業員に誇りを持って欲しいと願っています」。



千本杉の森の植林プログラム。いつかこの森の木から製品を

地に4棟の木造建築が並ぶ。工場棟は天井に張り巡らされた木材が柔らかな印象を与えており、集中心力を要する日々の作業にも安らぎを感じられる空間となっている。同社の工場は、従業員の働きやすさやリラックス効果をもたらず木材の持つ機能や意匠を存分に活かした設計となっている。当初は鉄骨の大規模工場に集約してはどうかという提案もあったそうだが、分棟すれば木造建築が可能ということがわかり、今の形に決めた。周囲の森林との調和も保たれ、来訪客から「きれいですね」「環境が素晴らしい」と嬉しい声をもらおうという。

地域の連携と貢献を視野に

同社は地域との連携も重視している。工場の敷地内の森林整備と再生は地元的那須塩原市森林組合と連携、工場の